

中学人権集会の校長挨拶

令和3年12月8日

「我がクラスの人権宣言」ありがとうございました。とても素晴らしい内容でした。

私は、皆さんが考えた「人権宣言」には共通するものがあるのではないかと思いました。

例えば、1年1組の「他人の普通を考えよう」、2年1組の「他者を思いやる」、そして3年1組の「Many people Many stories」、どれも自分とは異なる他者を理解しようとしています。他者には、それぞれ個性があり、その人にとっての「普通」があります。そのことに気付いた皆さんは、本当に素晴らしいと思いました。

ところで、皆さんは、この新聞記事を見たことがありますか。先週の金曜日、12月3日付けの下野新聞の1面です。「ジェンダーレス 第3の制服発表 佐野高・附属中」とあります。

1 第48522号 【1892年3月26日第3種郵便物認可】 下 野 新 聞



ジェンダーレス 第3の制服発表

生徒が発案、来春導入
佐野高付属中

性別にとられない「第3の制服」を導入しようとする佐野高、同校付属中で、生徒が主体となって新制服作りを進めている。両校では男子が詰め襟、女子はセーラーシャツだが、性別を問わずに選択できるジャケットを考案した。来年4月の導入を目指しており、2日には同校で試作品の発表会が開かれた。

新制服作りのきっかけとなったのは、生徒会長の高校2年土屋史輝さん(17)。

試作品の発表会には生徒ら約30人が参加した。披露されたのは濃紺のジャケット。現在、女子はリボンを着用しているが、新制服にはネクタイを採用した。既存のスカートやスラックスと合わせればスーツスタイルとして着用できる。

土屋さんは「みんなのおかげで出来た。性別だけでなく、さまざまな多様性が」と話した。

「第3の制服」作りに取り組んだ土屋さん(左)ら。右2人の生徒が着用しているのが、スータイプの新制服(2日後、佐野高)

女子のみがスカートまたはスラックスを選択できることになっている両校。7月の会長選挙で「女子はリボン、男子はスラックスなど」の決まりは自分らしさを尊重する社会の風潮にそぐわない」と訴え、新制服の導入を公約に掲げた。

青柳育夫校長は土屋さんの考えに賛同。夏休み明けの9月から準備が始まった。両校の生徒会役員ら計36人が中心となり、制服業者やデザイナーの協力を得て放課後に打ち合わせを重ねてきた。

面校の制服製作を手掛ける明石スクールユニフォームカンパニー宇都宮営業所の森下泰典さん(43)は「生徒が主体となった制服作りは全国でもまれな上に、3カ月という短時間で成し遂げた」とたたえた。

新制服は来年度の新生から選択できるようになる予定。県教委によると、県立学校で生徒が中心となって「第3の制服」を作るのは、把握している限りで初めてという。(小口華奈子)

尊重されるようになればいい」と笑顔を見せた。

共に制服作りに取り組んできた高校2年永島春佳さん(17)は「制服が辛いという話を友人から聞いたことがある。周りの目を気にせず、誰もが選びやすい制服になってほしい」と話した。

この記事は、非常に大きな反響を巻き起こしました。下野新聞のホームページに載ったこの記事の閲覧数は200万回を超え、コメント数も2000を超えました。本校のHPへの記事の転載が許諾されましたので、まだ読んでない人は、是非読んでみてください。

さて、本校の制服は、男子は学生服、女子はセーラージャケットですが、男性や女性を意識させる服装を着ることに苦痛を感じたりする人が、世の中には普通に存在していることがわかってきました。

これは、特別なことではなく、その感じ方の違いは、例えば、皆さんにお気に入りの服があるように、その人の個性と呼べるものです。感じ方にも個人差がありますが、本当に辛いと感じる人がいることは事実です。これまでは、それを我慢することが求められてきました。そんな中、学生服やセーラージャケットを着ることに苦痛を感じる人でも、らくに着れるような「第3の制服」をつくろう、と佐野高校そして附属中から、有志の皆さんが集まってくれました。

学生服やセーラージャケットに加えて、「第3の制服」を作るということは、多様な個性に対応できる制服を、誰でも選択できるようにしよう、ということです。この記事を見て、勇気づけられた人も、おそらく全国にたくさんいたのではないかと思います。

ただ、誤解をしないで欲しいことは、「第3の制服」は、学生服やセーラージャケットを着ることを苦痛に感じる生徒のためだけのものではなく、それを着たいと思う全ての生徒のための選択肢であるということです。第3の制服を選んだことで、その人が追い詰められるようなことは、あってはならないと思います。

「多様な個性に対応できる制服を誰でも選択できるようにしよう」このようなことを生徒自らが考え、実現できる学校というのは、今のところ、本校以外には、私は知りません。

皆さんは、すでに、「他人の普通」を考えることが出来る、それぞれの個性を認めることが出来る生徒であると、私は信じています。人権週間が、皆さん一人一人が「他人の普通」について考える機会になって欲しいと思っています。

校長 青柳 育夫